

Nコン2019 中学校の部 課題曲(混声三部/女声三部合唱)

「君の隣にいたいから」 編曲 加藤 昌則さん (作曲家・ピアニスト)

Q Nコン中学校の課題曲編曲は3回目だが、今回のSHISHAMO制作の曲の印象は？

加藤： 毎年、いわゆるポップスを合唱に編曲するっていうのが難しいテーマ…。

それをどういうふう合唱として成立させるかっていうのは、毎年、毎回考えていたことで、それは僕に限らず、毎年担当する作曲家の方がいろんな工夫をしているっていうのを、審査を通じたりしながら感じていたことなんですけど、今回、(中学校課題曲の編曲を担当するのが) 3回目ということで、それまでの2回の経験もあるし、しばらくずっと中学校の課題曲に触れてきた中で、クラシカルな意味での合唱もステキだけれど、例えばゴスペルとか、そうしたコーラスっていう曲調みたいなものが課題曲としてあってもいいのかなっていうのが、その前の2回(の課題曲編曲)と今回と、全然違う自分の中でのアプローチの仕方、それを中学生の子どもたちが自分たちのアイデアで、いろんな、ふだんの合唱ではない、コーラスというものをを見せてくれたらうれしいし、そういうコーラスというものも楽しい合唱の1つなんだなっていうふうに感じてくれたらいいかなというような曲にできるかなっていうのが、最初にSHISHAMOさんの曲を聞いた時の僕の印象でした。

Q アップテンポな曲、どう歌う？

加藤： おそらくカラオケに行けば、アップテンポのものって歌うのは、みんな(中学生は)好きだと思うんですね。(でも)合唱になると、例えばハモらせるのにどうしたらいいとか、いろんな技術的な問題とかいうのがあって、そうしたアップテンポなものっていうのは難しい感じがするかもしれないですけど、でも、例えばテンポ遅めなところからまず作って、それをどんどんどんどん速くしていく中で、速いって感じるんじゃなくて、それをある瞬間に処理するみたいな感覚を養うのは、合唱にしる、歌にしる、テクニックとしては必要なことだと思うんです。

だから、いままでに比べたら、そういった意味で違うアプローチ、挑戦をしなきゃいけないかもしれないけれど、決してそれは特殊なことではなくて、合唱をやっていけば、必ずそこに触れなければいけないと思うので、そういった意味で前向きに挑戦してくれたらうれしいですし、その中でいままでの合唱とかコーラスでは感じなかった楽しみというか、快感を味わってくれたら、とても書いた僕としてもうれしいなと思うところです。

Q 今回の編曲で大切にすることは？

加藤： 【リズム】と【ハモリ】ですね。

とにかくビートを感じて、その中にハモリを入れていくっていう、ゴスペルっていうイメージが強くあったんですけど、あーいったリズムの中でハモリをきかせるっていう、そういうパワフルな合唱みたいなものを意識して書いています。

Q 合唱でビートにのって歌うコツは？

加藤：例えばカラオケに行ったら、鳴っている音に合わせるじゃないですか。音楽が鳴っているところにのりますよね。コーラスも、伴奏がいれば、無意識にたぶん(ピアノの)伴奏にのっちゃうと思う。でも、本当は音を発する人たちは、全員でもって、ビートだったり、拍を、音楽を作っていかなきゃいけないわけですよね。すごく能動的に、積極的にやらなきゃいけないから、要はビートにのるのが遅れるっていうことは、ひょっとすると、無意識のうちに聴いて合わせているところがすごく強くあると思うので、まずそこを頼るのではなくて、自分でそういったリズムを作っていく、拍動を作っていくっていうのはどういうことなのか。(それを)考えるのは、中学生という年齢は決して早くはないと思うんです。だから、音楽を作っていくっていうのは、そういう能動的なところっていうのがあるんだっていうことを強く感じてもらえたら、この曲に限らず、今後の合唱、音楽をする時にすごく役立つ要素になるんじゃないかなと思います。

僕自身は演奏もするじゃないですか。ピアノを1人で弾く時は自分でももちろんやるんですけど、

そうじゃなくてバイオリンとかチェロとか、何人かの人でもって音楽を作っていく時っていうのは、誰かにのっていったるわけじゃなくて、みんなそれぞれがそれぞれに音楽を能動的に作り出して、それをキャッチしながら、全体は何するかっていうのをやってるわけですよね。演奏とか音楽をするっていう行為は本来そうだと思うので、それは僕が演奏しているから、ふだん強く感じてることではありますから、音楽を作るっていうことになれば、それはおのずと必要となってくることだと思うので、みんながそういうことを感じてくれたらいいなと思います。

Q 鼻濁音についてはどう？

加藤：鼻濁音を使ったほうがいいのかと、使わないほうがいいのかっていうのは、人それぞれの価値観、だと思っただけです。だから、僕はどっちがいいっていうのは特に思っていないで、もしかしたら鼻濁音にしたほうが歌いやすいっていう場合もあるかもしれないじゃないですか。それはそれで、もちろん鼻濁音で歌っていただいてもいいと思うんですけど、両極を試すといいと思うんです。

鼻濁音で歌わない場合はこう、鼻濁音で歌う場合はこう、で、結果、「鼻濁音がいい」というふうになったほうが、鼻濁音を選択するのが、意味がはっきりと分かるじゃないですか。そういうふうにいるいろいろ試してほしいかなと思います。

早口のところも、早口をただ練習するんじゃなくて、早口に感じないテンポはどのテンポなのかっていうところでまずやって、その感覚をだんだん上げていくと、いままで速と思っていたことがだんだん速く感じなくなる。どんどんどんどんテンポをアップしていけば、速いんだけど速くないみたいな感覚っていうのがつかめるかなと思います。

Q 中学生にどんなふうに歌ってほしい？

加藤：いちばん最初に中学校の編曲を担当した「証(あかし)」(第79回Nコン課題曲)っていう曲は、いまだにいろんなところで歌われていて、合唱コンクールでやったり、卒業式で歌ったりっていう、あの年の課題曲ではあったけれど、年を越えても、たぶん何かがあるからずっとそれを好きでいてくれて、大事な作品になって、歌ってくれていると思うんですよね。今回の課題曲も、これから半年ぐらいずっとかけて取り組んでいくんだと思うんですけど、きっと僕が思っている以上に、詞だったり、メロディーの中に共感できるものっていうのがいっぱいあると思うんですよ。ただコンクールのために歌うものじゃなくて、それをきっかけにこの歌が、1人1人の、勇気づけられる歌だったり、元気になるものだったり、みんなで楽しめるものだったり、コーラスとして楽しいものになってくれたらいいなと思うし、なれるものになったんじゃないかなと自分では思いながら書いたので、そのへんは楽しんでほしいなと思います。